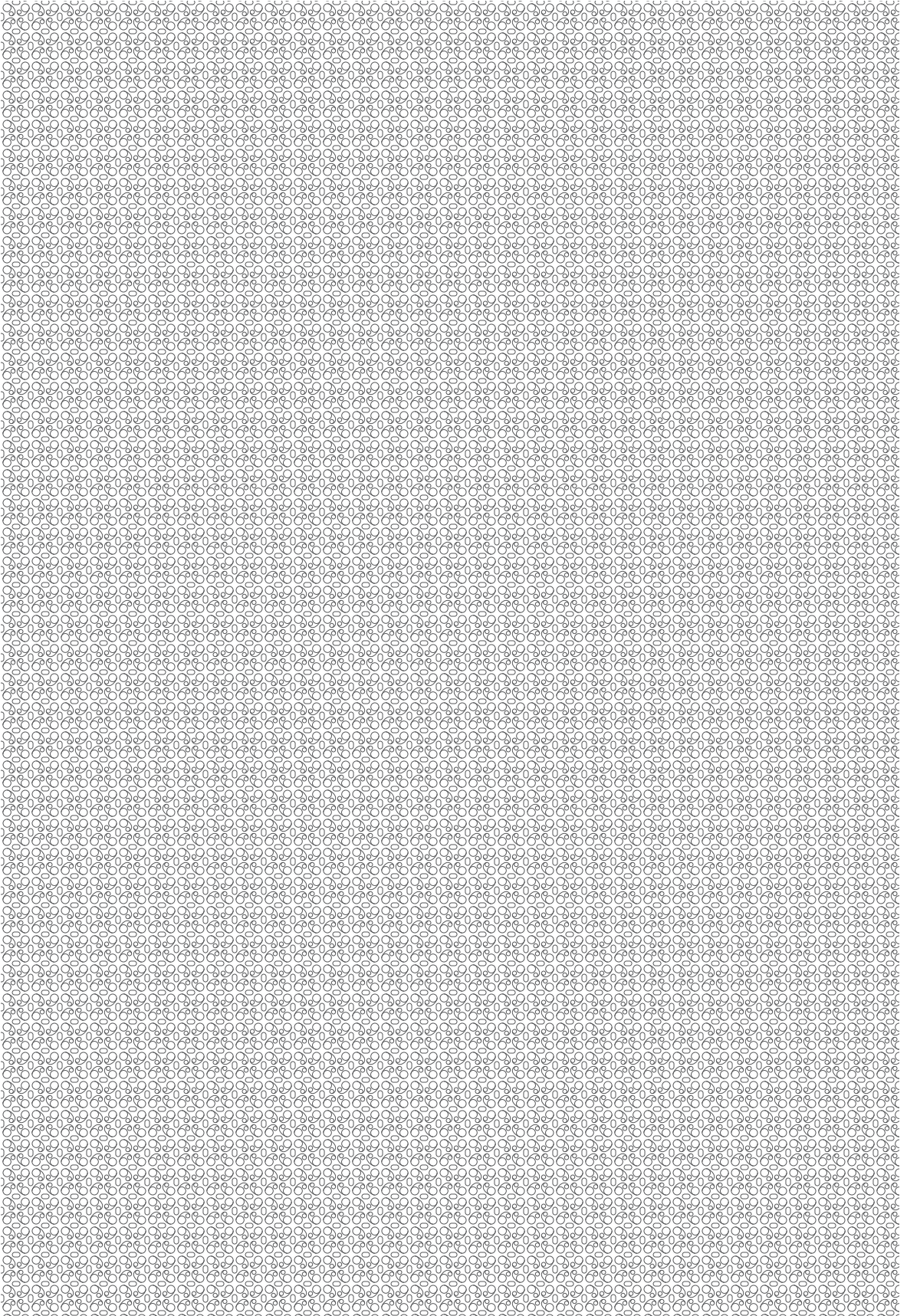


## 2026年度入学試験問題

# 国語

(試験時間 13:25～14:25 60分)

1. 解答用紙は、マーク解答用紙のみです。
2. 解答は、必ず解答欄にマークしてください。解答欄以外にマークすると無効となります。
3. 解答は、HBの鉛筆またはシャープペンシルを使用し、訂正する場合は、プラスチック製の消しゴムを使用してください。特に、一度マークした箇所を修正する場合、しっかりと消してください。消し残りがあると、解答が無効となることがあります。また、消しくずを残さないでください。
4. 解答用紙を折り曲げたり、汚したりしないでください。
5. 解答用紙には、必ず受験番号と氏名を記入・マークしてください。未記入や記入・マークミスなどがあった場合は、当該科目の解答は無効になります。



一 次の問に答えなさい。(30点)

〔問一〕 次の傍線部の漢字と同じ漢字を含むものを、左の各群の中から一つずつ選び、符号で答えなさい。

ア 初志をカ|ンテ|ツする

A テ|ツテ|イ抗戦を誓う

D 大臣がコウテ|ツされる

イ 人権をヨウゴ|する

A 病院でセイヨウ|する

D ボンヨウ|な成績に終わる

ウ 相手の意見にカイギ|をいただく

A 周囲をケイカイ|する

D ユウカイ|事件のドラマをみる

エ 英雄がレイラク|の道をたどる

A 強国にレイゾク|する

D ボウレイ|がさまよう

オ 権力者にシユウハ|を送る

A 激しい技のオウシユウ|が続く

D 相手の頼みをイツシユウ|する

B テ|ツコウセキを輸入する

E 赤字事業からテ|ツタイ|する

E 赤字事業からテ|ツタイ|する

B 新人候補をヨウリツ|する

E ヨウエン|な魅力をたたえる

B 新人候補をヨウリツ|する

B 成功する見込みはカイム|だ

E 敵方の人間をカイジユウ|する

B 授業のヨレイ|が鳴る

E 社会のコウレイ|化が進む

E 社会のコウレイ|化が進む

B チユウシユウ|の名月を拝む

C シユウブン|により評判が落ちる

E 勝利へのシユウネン|を燃やす

〔問二〕 次の漢字の読みを、左の各群の中から一つずつ選び、符号で答えなさい。

ア 懇ろ

A おもむろ

B むしろ

C ねんごろ

D たむろ

E ないがしろ

イ 訃音

A とおん

B といん

C ほうおん

D ふいん

E ちようおん

〔問三〕 次の慣用句の空欄に入れるのにもっとも適当なものを左の中からそれぞれ選び、符号で答えなさい。

余勢を

ア

拍車を

イ

前後を

ウ

A かる

B さらう

C まわす

D かける

E わすれる

〔問四〕 次の言葉の意味としてもっとも適当なものを左の中からそれぞれ選び、符号で答えなさい。

- ア 檄げきを飛ばす
- イ 出藍しゅつらんの誉れ
- ウ 勿頸ふんけいの交わり

- A 自分の主張を大勢に知らせて同意を求めること
- B 血縁による他人よりも強いつながりのこと
- C 元気を失っている者を励まして活気づけること
- D 弟子が師よりも優れた才覚を発揮すること
- E 生死を共にするようなほど親密な関係のこと

〔問五〕 次の意味を表すものとしてもっとも適当なものを左の中からそれぞれ選び、符号で答えなさい。

- ア 目的を果たすために苦心を重ねること
- イ 物事を途中で休まずに成し遂げること
- A 捲土重来けんどちようらい
- B 一気呵成いっきかせい
- C 虎視眈眈こしたんたん
- D 臥薪嘗胆がしんしょうたん
- E 雲蒸竜変

二 次の文章を読んで、後の問に答えなさい。(40点)

デジタル化社会における重要な変化は、一人ひとりが互いに強い影響を与え合うような状況が生まれるということである。個人は、SNSやオンライン上での情報交換から影響を受けるが、それだけでなく、匿名で意見を表明する「大衆」の感情や、それを先導しようとする「オピニオンリーダー」からも影響を受ける可能性がある。つまり、デジタル化社会においては、人と人とのオンライン上で「密」な関係になる。2021年1月、アメリカ合衆国議会の議事堂が襲撃される事件が起きたが、襲撃に参加した人の多くは「witterで拡散された情報の影響を受けていた。そこで形成された「密」な関係が、このような事件を引き起こした側面がある。

こうした密な関係は、各人の選択を通じて形作られていく。ウォルター・リップマン (Walter Lippmann) が『世論』で指摘しているように、マスメディアなどから得た情報を通じて、人間は世界についてのイメージを頭の中で構成する。リップマンはそれを「擬似環境」と呼ぶが、人間はこの擬似環境の中で自分が見たいと思うものを選んで見るようになる。特にオンライン上では、膨大な情報と検索アルゴリズムによって、このような選択が容易に行われる(いわゆるフィルターバブル)。しかも、選択しなかった情報は、当人の視野にはほとんど入ってこない。

つまり、オンライン上の密な関係は「体験の個別化」を引き起こす。言い換えれば、デジタル空間においては、知らず知らずのうちに個人が都合よく選び取った情報が、その人にとって支配的になっていき、こうして人びとは、情報を個別に体験するのである。(2)、極右や極左の人びとは、自分たちの考え方に近い情報を発信するウェブサイトにアクセスする傾向がある。検索アルゴリズムが、当人たちの好みそうなウェブサイトを勧めてくることで、この傾向は強まる。その結果、情報を発信する側の影響力が非常に大きくなる。

この体験の個別化は、「活動」の基盤となる「固有性」——個々人が固有の存在であるという事実——を含意しない。なぜなら、体験が個別化されたとしても、それだけでは一人ひとりの体験に固有の特徴が与えられるわけではないからである。体験の

固有性と個別化が結びつくのは、それとは異なる体験が社会の中で共存している場合である。他者による異なる体験があるからこそ、固有性が生じる。デジタル空間で体験が個別化されている状況では、往々にして他者の体験は視界の外に置かれ、人びとは孤立状態に陥りやすい。

「活動」に対して「孤立 (loneliness)」が及ぼす弊害については、<sup>(注4)</sup>アレントも論じている。

彼女によれば、人びとが密になることで、孤立状態に陥ることもあり得る。真の孤立とは、人と人とのあいだの空間が埋め尽くされて、身動きが取れなくなるような状態に陥ったときに生まれる。そのとき、人は自分の体験の固有性、ひいては自分自身の固有性を見出せなくなり、一切の「活動」が行えなくなってしまう。

こうしたアレントの考えを踏まえると、オピニオンリーダーと大衆とのやりとりが人を孤独にし、自分という存在の固有性を失わせ、自ら意思決定を行うことを難しくさせるのかもしれない。まさにそのことが、デジタル化時代のデモクラシーが抱える本質的な危機なのではないだろうか。この点において、アレントの次の一節は注目に値する。

今日、他人にたいする「客観的」関係や、他人によって保証されるリアリティがこのように奪われているので、<sup>(注5)</sup>孤独の大衆現象が現われている。大衆社会では、孤独は最も極端で、最も反人間的な形式をとっている。なぜ極端であるかといえば、大衆社会は、ただ公的領域ばかりでなく、私的領域をも破壊し、人びとから、世界における自分の場所ばかりでなく、私的な家庭まで奪っているからである。

つまり、大衆が自己を見失った結果として、人間としての条件を織りなす領域が縮減されてしまう。こうして、「公的領域が最終的に消滅すると同時に私的領域も一掃される運命にある」のである。<sup>(3)</sup>デジタル化社会がこの先直面するかもしれないデジタル状況とは、このようなものかもしれない。

デジタル化社会が導くディストピアを取り上げたものは、SF作品も入れれば多数に上る。それらの中で描かれるのは、暴走

するAIと機械によって殺される人間たちであるとか、人間の知能をはるかに上回るAIに統制される人間であるとか、デジタル技術によって人間の行動が完全に監視される社会であったりする。それらが現実のものとなる可能性はゼロとは言い切れないし、シンギュラリティの問題は、科学者たちによって真剣に議論されている。【I】

しかし、われわれにとって気がかりなのは、それとは異なる意味での「特異点」である。シンギュラリティも問題かもしれないが、人間にとって同じく過酷なのは、自分たちのアクティビティが制約され、「反人間的」な孤立状態に陥ることである。それは機械やAIによって引き起こされるのではなく、人びとが自ら制約することによってである。デジタル化の行き着く先に到来するかもしれないディストピアは、機械やAIによってではなく、私たち人間によってもたらされるのかもしれない。「活動」「仕事」「労働」といった、人間的なアクティビティの喪失によって孤立状態に陥るという意味での「特異点」が、われわれが考えるデジタル時代のディストピアなのである。【II】

通常のシンギュラリティとは異なる、人間のアクティビティを喪失させる「特異点」としてのディストピアはどのようなときに起こるのだろうか。この問いは、次の命題の(4)である。デジタル化時代の「人間の条件」とは一体いかなるものなのか。

ここで改めて、人間にとって「接触するもの」全てがその存在の条件となるという、アレントの命題に立ち戻ろう。人間の条件を構成するのは、一人ひとりが何らかの意味で関係を形づくるところの外部との接触面だというのが、この命題の背景にある重要なアイディアである。このことを踏まえ、デジタル化時代においては、外部世界との接触の仕方も、他者との接触の仕方も、大きく変わるということを考え直す必要がある。デジタル化が進む今、人間同士の関係も、人間と物との関係も変わりつつある。そのことは、人間の条件をどのように変えていくのだろうか。

人は、「活動」「仕事」「労働」といったアクティビティを通じて、「自然」、「人工物」や他者を含めた外部世界と接触する。このため、これらのアクティビティのあり方がどのように変わるかということが、人間の条件を形づくることになる。いまや「労働」の多くが、AIや機械に置き換えられている。さらに、「仕事」や「活動」にしても、デジタル化の影響を受け

ざるを得ないところまで来ている。こうしたなかで、AIや機械が学習を通じて、人工物を自ら作り出せるようになっていくことは大きい。それによって、クリエイティブな「仕事」も、AIや機械の助けを借りる時代になりつつある。それだけでなく、人と人のコミュニケーションにおいても、デジタル技術を介在させたかたちが増えている。(5)、外部世界との接触全てが、デジタル技術に依存したものとなっていくだろう。

アクティヴィティ全般にデジタル技術が介入することは避けがたいかもしれないが、「活動」がAIや機械によって完全に代替されるわけではない。人間の「語り」や「言葉」は、たとえ人工物を介したものであっても、他者との対峙たいじという本質を失うことがないからである。AIや機械との擬似的交流が存在するにしても、「活動」とは、定義によって、生きた人間との接触なのである。**【III】**

生身の人間との交流における本質とは何かということは、AIや機械との擬似的交流と、人間との交流とを比較し、そこで見出された違いから理解できるだろう。違いを見出そうとして、一切の違いがないという思いを抱く人もいるかもしれない。しかし、そうだとしても「活動」という営為がもたらすものが何かということを考える契機が与えられる。(6)、「人との関わりとは何か」という問いがより差し迫ったかたちで現れるのが、デジタル化時代の新しさなのかもしれない。他者との接触面が真に問題となる時代が、デジタル化時代と言えるのである。

このように考えていけば、(7) デジタル化時代の人間の条件とは、人間そのものではないだろうか。つまり、一人ひとりが、他者との接触面を豊かに持ち、人びとの固有性を尊重し合いながら、孤立状態に陥らないことが、その条件の構成要素である。デジタル化の時代にあつては、他者との「接触」回数は希薄でありながらも膨大なものとなるかもしれない。それは、情報技術をはじめとする技術変化による必然と言えよう。こうしたなかで、デジタル化時代の人間の条件は、一人ひとりの人間に、接触面からの退避を認めることを倫理的に要請すると同時に、自分自身の選択によって、再び対等なかたちで復帰できることを要請する。人間の接触面となるところの「活動」領域からの退避可能性条件と対等復帰条件の二つを入念に調整することによって、デジタル化時代のディストピアに陥ることを回避できるのではないだろうか。**【IV】**

デジタル化が進むにつれて、これまで人間にしかできないと思われていたことが、AIや機械にもできるようになりつつあることも重要な点である。啓蒙主義以降の近代社会の大きな特徴は、合理性によって社会を把握しようとするところにある。人間には理性があり、その点が他の動物と異なるというのが、ある意味で、近代以降の社会の基本公理とされてきた。この人間観に従う限り、(9)。「人間が本当に『理性的動物』であるならば、新しく発明された電子計算機は、実際、小型人間であろう」とアレントは述べる。ここにおいて「小型人間Ⅱホムンクルス」は、アレントが考える「労働」を代替するものにすぎない。

しかし実際には、電子計算機は、他のすべての機械と同じように、人間の労働力の単なる代替物であり、人工的な改良物にすぎず、たとえば乗法を反復的な加法に置き代えるというような、すべての操作を最も単純な構成要素の動きに分解する昔からある分業装置に続くものである。

アレントが知る当時の電子計算機は、現在の水準からすれば格段に性能が劣る。それを「小型人間」と呼ぶならば、人間の労働を代替する現代の機械は、もはや「小型人間」などではなく、「理性的」動物としての人間を凌駕するものとなっている。そこにおいて、人間を「理性的」動物（あるいは「労働する動物」として捉えている限り、デジタル化時代の「人間の条件」は、ある意味で「自己破壊的」である。【V】

しかし、人間の本質を「労働」や「理性」だけで捉える必要はない。人間は、世界の一部を消費するだけでなく、世界の一部を作り出す。独立した存在ではなく、他者を認め、語り合う。AIや機械とは異なる存在として、あなたは何をするのだろうか。このとき、「人間とは何か」という問いは、全ての人間にとって現実的なものとなる。デジタル化が進んでいった、その先に訪れるのは、人間存在が問われ続ける社会ではないだろうか。人間が人間らしく生きていくことが可能な時代が到来するかもしれないのである。

（加藤晋・飯田高「デジタル化時代の倫理」による。出題の都合上、一部中略した箇所がある）

- (注1) 「Twitter……短い文章を投稿し、他のユーザーと交流できるSNS「X（エックス）」の旧名。
- (注2) ウォルター・リップマン……アメリカ合衆国の政治評論家。
- (注3) 「活動」……この後言及されるアレントは、他者との共同行為や言葉によるコミュニケーションを「活動」と呼んだ。
- (注4) アレント……ハンナ・アレント。アメリカ合衆国で活動したドイツ出身の政治思想家。
- (注5) シンギュラリティ……人工知能が人間の知性を上回る「技術的特異点」のこと。

〔問一〕 傍線(1)「デジタル化社会においては、人と人がオンライン上で『密』な関係になる」とあるが、この「密」な関係」と不可分な社会の状況において筆者はどのようなことを問題視しているか。その説明としてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A 人びとが情報で形成された疑似環境に閉じ籠ることで、他者が理解できないような独自の思想を先鋭化させ、社会から受け入れられなくなることを。
- B 人びとが自分に都合のよい情報ばかりに触れることで、他者の体験に基づいて自己を相対化することができず、自分らしさを損なってしまうこと。
- C 人びとが自分の考えに近い情報を選び続けることで、各人の固有性に基づいて体験が個別化されるようになり、意思決定を行うのが困難になること。
- D 人びとが身動きできないほどの情報過多に陥ることで、他者のあらゆる情報体験に接触せざるを得なくなり、独自の考え方や視点を見失うこと。
- E 人びとが情報を各々の価値基準において解釈することで、自身の情報体験を他者と広く共有することが難しくなり、孤立した状態へと追い込まれること。

〔問二〕 空欄(2)(5)(6)に入れるのもっとも適当な組み合わせを左の中から選び、符号で答えなさい。

- |   |     |     |     |      |     |     |
|---|-----|-----|-----|------|-----|-----|
| A | (2) | 例えば | (5) | そのため | (6) | つまり |
| B | (2) | 例えば | (5) | つまり  | (6) | ただし |
| C | (2) | だから | (5) | そのため | (6) | さらに |
| D | (2) | だから | (5) | または  | (6) | さらに |
| E | (2) | しかし | (5) | そのため | (6) | つまり |

〔問三〕 傍線(3)「デジタル化社会がこの先直面するかもしれないディストピア的状况」とあるが、これはどのような状況を想定

したのか。その説明としてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A 人間が生み出した機械やAIが人間を上回る存在に取って代わるといふ点で、事実上人間が自ら自分たちのアクティビティを制約してしまっているという状況。

B SF作品で描かれるような機械やAIが暴走して人間を虐げるといった状況ではなく、デジタル化により人間同士の信頼関係が希薄化して大衆の孤独が深まるという状況。

C 機械やAIが公的領域から私的領域へと活躍の場を広げることで、人間の活動領域が徐々に侵食されつつあるなか、人間の存在意義があらためて問い直されるという状況。

D 社会のデジタル化によって反人間的な仕組みが形成され、仕事や労働の機械化が常態化してゆくにともなって、人間が本来持つ創造性や思考力が奪われていくという状況。

E デジタル化社会における人びとの選択が自らの主体性の喪失をもたらし、公的領域と私的領域の双方の消滅によって人間の本質的な営みが失われていくという状況。

〔問四〕 空欄(4)(9)に入れるのもっとも適当な組み合わせを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A (4) 言い換え (9) AIはきつと小型人間の域を出ない
- B (4) 言い誤り (9) AIはもはや小型人間同然となろう
- C (4) 言い換え (9) AIはずつと小型人間の一部分である
- D (4) 言い誤り (9) AIが小型人間を超えることはない
- E (4) 言い換え (9) AIはもう小型人間どころではない

〔問五〕 傍線(7)「デジタル化時代の人間の条件とは、人間そのものではないだろうか」とあるが、ここで「他者との接触

面」が重視されるのはなぜか。その理由としてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A デジタル技術が人間の「活動」をすべて代替できるわけではなく、対峙する相手が人工物であっても「語り」や「言葉」がそこに存在する以上、それは人間の本質的な行為であるから。
- B デジタル技術によって他者との接触回数が減少することにより、人びとが孤立状態に陥りやすくなることを防ぐため、人間同士が直接的に交流する機会を積極的に増やす必要があるから。
- C デジタル技術を介した接触であっても相手が生きた人間であるなら、それは人間的な活動を示す行為であり、AIや機械との擬似的交流もむしろ人間の自己理解を促す端緒になるから。
- D デジタル技術による擬似的交流は人間同士が直接顔を合わせる交流と実質的に差異がなく、どちらも他者との接触を通じて人間の固有性を維持しつつ孤立を防ぐ働きを持っているから。
- E デジタル技術の発展にともなうて生身の人間との交流が希薄になるため、AIや機械との擬似的交流を日常的に取り入れていくことで、かえって他者と対峙する経験が豊かになるから。

〔問六〕 傍線(8)「これまで人間にしかできないと思われていたことが、A Iや機械にもできるようになりつつある」とあるが、このような状況における筆者の「人間観」はどのようなものであるか。その説明としてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A 「理性」を人間の普遍的な公理とする従来の人間観は排他的であり、そのような人間観が人間社会の多様性を破壊することがないよう定義を見直す必要がある。

B 「理性」に基づく能力を絶対視する従来の人間観は偏狭的であり、人間が理性を持たない存在をも他者として認め、語り合おうとする姿勢が今後は重要となる。

C 「理性」のみに人間の価値を見出そうとする従来の人間観は限定的であり、人間の情緒や倫理的なつながりを重視し、人間らしさを育んでいくことが課題である。

D 「理性」を人間独自の特徴とする従来の人間観は一面的であり、他者と関わり、主体的な創造を行う存在であることも含めて人間を見つめ直していくのがよい。

E 「理性」を人間の核と考える従来の人間観は破滅的であり、人間が労働に従事するだけでなく、A Iや機械を有効利用できる世界を創造することが求められる。

〔問七〕 次の一文を挿入する箇所としてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

なぜなら、それは人間存在に向けられた固有のものではなくなくなってしまっからである。

A 〔Ⅰ〕      B 〔Ⅱ〕      C 〔Ⅲ〕      D 〔Ⅳ〕      E 〔Ⅴ〕

〔問八〕 本文の内容としてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A オンライン上で意見を表明する「オピニオンリーダー」は、さまざまな思想を持った異なる立場にある人びとに偏った共通認識を抱かせることで、大衆を統制する影響力を持っている。

B アレントは、デジタル技術による交流の発達によって自由な自己表現が可能になる一方で、人びとが他者との比較や評価競争のなかで感じるようになった疎外感を「孤独」と表現した。

C AIや機械が暴走して人間に危害を加えるといったシンギュラリティの問題は、あくまで空想の産物であり、デジタル社会が行き着く未来像とはまったく無縁の問題であると言わざるを得ない。

D デジタル化時代においては、一人ひとりが他者との接触から自由に退避でき、望めば不利なく対等に復帰できるといふ条件を保障することが、人間らしさと社会的尊厳を守るために不可欠である。

E 電子計算機は人間の労働力の単なる代替物である他の機械の延長上に存在するものであり、単純な構成要素からなるという点において「小型人間」と形容できるほどの能力を備えたものではない。

三 次の文章を読んで、後の問に答えなさい。(30点)

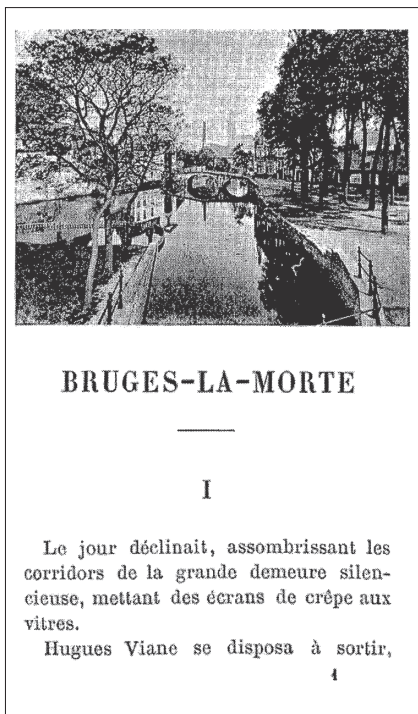
(注1)  
ローデンバックの『死の都ブリュージュ』(二八九二)の最初のページには、いまでも人を驚かせる力がある。写真を通して現れようとしている何かと、言葉が語ろうとする物語とのあいだに、かならずしも調和しない、異質なものと感じられるからだ。

写真に対して、私たちは外にいる。外にいて、そこに現れたものをすみずみまで見ることができる。それに対して、テキストの場合、その中に入らない限り何も見えてこない。言葉の世界に浸り、さまざまな情景を思いえがかない限り、何も感じられないのだ。ローデンバックの作品冒頭部は、言葉と写真という二つの異質なメディアを同じページ上に共存させることで、新しい作品空間を創りだしている。それは目を見開いて観察することと、はっきり見えないが感じられる世界を想像することを、同時に求めている。言葉と写真という二つのメディアが緊張をはらみながら対峙<sup>たひじ</sup>している空間で、いったいどのような想像世界が立ち上がるのだろうか。

写真が使われている小説を探してみると、同じページに言葉と写真を印刷する安価な技術が開発された十九世紀後半以降、数多くの作品を見つけることができる。

(2)

ジョルジュ・ローデンバックの作品のように、写真が言葉の世界に寄り添うだけでなく、独自の世界観を構築している作品は、きわめて例外的である。言葉と写真がたがいに排除しあいながら、思いがけない場所でふたたび出会い、言葉だけでも、写真だけでも到達できないような、未知の空間に読者を連れ出すような作品は数えるほどしか存在しない。例えば、



ローデンバック『死の都ブリュージュ』

アンドレ・ブルトン『ナジャ』（一九二八）、ロラン・バルト『明るい部屋』（一九八〇）、W・G・ゼーバルト『アウステルリツツ』（二〇〇一）。これらの作品に写真がないことは想像することさえできないが、他の作家についてそのような例をあげられるだろうか。一八三九年の写真の発明から百八十年が経っているのに、数えるほどしか傑作がないのはどうしてなのだろうか。

ひとつには、言葉と写真がそれぞれに喚起するイメージが、根本的に異質だという事情がある。言葉の喚起するイメージには、眼で見て確かめられる形が備わっていない。言葉は読者を何かに巻きこむものである。いったん巻きこまれると、読者は自分がまるでその世界のただなかにいるかのように感じる。何かを見ているというより、何かに全身で立ち向かっている。意識だけでなく、身体もふくめて、全身の感覚を研ぎ澄ませて何ものかに注意を凝らしている状態である。何ものかの存在はありありと感じられるが、そのすべてが眼で見て確かめられるわけではない。

それに対して、写真は、見たところすみずみまで明らか、一点の曇りもないものである。それは視覚的存在そのものであり、見るべきものは眼の前に、否定しようのない形であらわにされている。

(3) 写真は、機械によって作成されたイメージで

(注2)

ある。カメラを通して見る自然は、肉眼に語りかける自然とは異なっている。ヴァルター・ベンヤミンは端的に、「人間によって意識を織りこまれた空間の代わりに、無意識が織りこまれた空間が立ち現れる」と指摘した。肉眼で見たときには気がつかなかった細部が、レンズを通して初めて可視化される。<sup>(4)</sup>いつも通っている道でさえ、写真では別のものに見える。写真は、意識できない部分を視覚化することで、現実を見慣れないものとして見せる力をもっている。そこには言葉では汲み尽くせない、過剰な何かがある。そのままでは、人間化された物語とはその合わないところがあるのだ。

二つの媒体は、たがいのコミュニケーションを妨害している。言葉には言葉の、写真には写真の論理があり、それぞれ独自のコミュニケーションを展開しようとしている。その二つが、同じページに印刷されたとき、いったい何が起るかという素朴な疑問は、実はまだ十分に考えられていない。ローデンバックの『死の都プリュージュ』が驚きをあたえるのは、まったく異なる二つのイメージのあり方が、その違いを維持したまま同じページに共存しているからである。挿絵であれば、物語内容を表したものだ、すぐに納得できるだろう。挿絵は人間の手によって描かれた作品であり、言葉の世界を視覚的に捉えなおそうとする

意志がただちに感じられるものである。挿絵は、言葉によって喚起される世界と (5) しているからだ。それに対して、写真には無作法で、言葉に収まりきらないところがある。写真が伝えてくる街の景観と、言葉が語ろうとする物語とがどのように関係するのか、読者はには把握できず、戸惑いがいつまでも残る。そこには、これまでにないイメージ体験の萌もぎが見えている。それはいったいどのような体験なのだろうか。

(注3)  
ハンス・ベルテインクを参照してみよう。ベルテインクは、イメージについて考えるとき、三つの次元を明確に区別した。イメージ、支持体、身体という三つである。支持体とは、本、スクリーン、舞台など、あるイメージが展開される物質的な場所を意味している。支持体の上にあるイメージを見ると、イメージの中に入りこみ、現実とは異なる身体感覚が、まるで遠隔操作されているかのように感じることがある。本やスクリーン、舞台の上にあるイメージが、自分のもう一つの身体であるかのように思えてきて、それが現実の身体感覚と同時に存在するようになる。そしてイメージの現れる場所が、本か、スクリーンか、舞台かで、その身体感覚はずいぶん違ったものになる。支持体の違いによって、イメージのうちに感じる身体感覚も変わっていく。ずいぶん奇妙な話に思えるが、メディアに熱中している人の中で何が起きているのかを考えてみれば、納得できるのではないだろうか。

支持体は聞き慣れない言葉かもしれないが、心の中に思い浮かべるイメージと対比して考えるとわかりやすい。心的イメージしかない場合、もうひとつ別の身体感覚の中に入りこむような、強い強度をもつイメージ体験を得ることは難しい。夢を見てるのでない限り、たやすく現実の身体感覚が戻ってくるからである。心の中で思い浮かべるイメージは、物質的な支えがないために、すぐに別のものに置き換わり、たやすく消えていく。

それに対して、意識の外にあって、じっと見つめることのできる物質、つまり支持体があると、その上に現れるイメージを認識しつづけることができるようになる。イメージを注視していると、現実とは別次元の、もうひとつの身体を生きているように感じられてくる。より正確には、現実の身体感覚を保ったまま、支持体の上では、想像世界を生きる別の身体感覚を深く感じ取ることができるようになる。ベルテインクは、現実の身体とは異なる支持体上の身体を、「メディア的身体」と呼んだ。小説、

絵画、映画、演劇など、異なる芸術形態に人が飽かずに熱中するのは、それぞれの支持体の上に実現されるメディア的身体のあり方に、(6)を見出すためだろう。もうひとつの身体を生きることによって、初めて現実の身体を生きると感じられることさえあるのだ。

問題は、言葉と写真とでは、メディア的身体のあり方がまるで異なっていることである。文字を通して活性化するメディア的身体と、写真を通して眼の前に現れるメディア的身体とでは、性質があまりに異なっているために、同じページ上に共存させることが難しい。言葉が身体感覚に変わるのは、憑かれたように物語にのめりこんでいく瞬間である。読者は自分で見出した脈絡に巻き込まれるようにして、物語の世界に入っていく。それに対して、写真は見る者を立ち止まらせる。そこに何が見えているのかを考えさせる。写真は読書を中断し、読書は写真を忘れさせる。

写真を取り入れた文学作品（小説、自伝、伝記）の歴史をたどると、言葉と写真がたがいの持ち味を活かしながら、新しい作品空間を切り開いていく過程が、いかに険しい道なのであったかが見えてくる。写真が発明されてからの半世紀は、そもそも言葉と写真を同じページに印刷すること自体が難しかった。それを可能とする、写真をもとにした石版画（シミリグラヴール）の技術が開発された一八八〇年代後半以降、二つのメディア上の身体感覚を競合、共存、調和させるために数多くの実験がなされたものの、両者が喚起するメディア的身体があまりに異質であるために、結局は忘却されていった。言葉が優勢になるか、写真が優勢になるか、いずれか一方の場合がほとんどで、残る他方はその存在さえ忘れられてしまう。現在でも、伝記や自伝では、写真を光沢紙に印刷し、本の冒頭や中ほどにまとめて挿入されることが多い。これは写真の「魔力」を封じこめる手続きではないだろうか。また、現在もなお数多く制作されている写真文学では、ただの一枚で人を魅了するような、芸術作品としての写真が使われることはほとんどない。そのような写真があると、作品が写真アルバムになってしまう恐れがあるためだ。言葉と写真を共存させるためには、写真の力を制御し、そこに読者が明確に感じ取れる、一定の方向性とリズムをあたえる必要があるのだ。

しかし、言葉と写真で媒質がどれほど異なっていようと、イメージが問題となる場合、読書の行為そのものには変わりはない。

(7)、イメージは、単なる知覚の行為対象ではないからだ。それは支持体上の素材に、生気を吹きこむことで立ち上がるものである。読者は支持体上の素材に自分の好奇心をもちこみ、そこにひとつの世界が広がっているかのように振る舞う。支持体IIメディアの中を動きまわる身体感覚をもつことで、私たちは一時、潜在的な可能世界の中で生きるようになる。先述のように、現実の身体感覚を保ったまま、支持体の上では、想像世界を生きるといふ、二重の身体感覚をもつようになる。二重性の強度が増すと、目覚めたまま夢を見ているような状態にさえ陥る。これが誇張でないことは、本、映画、ゲームに熱中した経験を考えればわかるだろう。そのとき、メディア上に存在する言葉や図像は、あたかも生きて話しかけてくるように感じられる。さらには「メディアが視覚行為を通して私たちの身体経験を操っている」かのように感じられることさえ起こりうる。

写真文学の問題は、こうして次のようなものとなるだろう。言葉と写真という、まったく異なるメディアから生じるイメージが、一体となって想像力を駆り立てるとき、そこにどのような新しい想像世界が生まれるのだろうか。さしあたり、眼の前にあるのは、潜在的な世界に到達するための、二つの異なった道筋である。言葉と写真とは、眼の前にある素材に生気を吹きこむ過程があまりに違っている。そこで生じる二つの身体感覚のずれがうまく制御されていないと、写真は物語を説明する挿絵となり、言葉は写真を解説するキャプションとなる。そうではなく、言葉と写真が競合し、見えないはずの言葉の世界が見えるようになり、動かないはずの写真が作品世界の中で動きはじめる——ローデンバック、ブルトン、バルト、ゼーバルトが実現したような、そのような瞬間を演出することがどうすれば可能となるのだろうか。

すぐに言えることは、写真文学で用いられる写真が、静止したものではなく、そこから何かが動きはじめる、ひとつの萌しと感じられるとき、そこに言葉だけの世界とは異なる想像世界が生まれるということだ。写真そのものは動かない。しかし、写真が作品世界と深く連関すると感じられるとき、見ている者の中で何かが動きはじめる。写真には写されていない領域に、視線が向かいはじめなのだ。本に熱中した者が、しばしば文字から眼を上げてはるかな世界に思いを凝らすように、写真を見つめる者が、そこには見えない光景に眼を凝らすようになる。そのとき、写真は生気を吹きこまれ、言葉と一体となった新しいメディア的身体となったと言えるだろう。

（塚本昌則『写真文学論——見えるものと見えないもの』による。出題の都合上、一部中略した箇所がある）

〔注1〕 ローデンバック……ジョルジュ・ローデンバック。ベルギーの小説家。代表作の『死の都ブリュージュ』は、愛妻と

死別した夫が妻をしのびながらブリュージュで隠遁生活を送る話である。

〔注2〕 ヴァルター・ベンヤミン……ドイツの思想家、批評家。

〔注3〕 ハンス・ベルティンク……ドイツのメディア理論家。

〔問1〕 傍線(1)「人を驚かせる力がある」とあるが、『死の都ブリュージュ』の「最初のページ」が人を驚かせるのはなぜか。

その理由としてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A 写真と言葉という相容れない二つのメディアが一体化していることで、二者の喚起するイメージが判別できなくなり、読み手の目をしばらく混乱させるから。

B 写真と言葉が反発し合いながら一つの物語を織りなしていることで、物語から立ち現れるイメージがかえって深まり、作品のかもしれない非日常性が増すから。

C 写真と言葉がそれぞれの世界を主張しながら共存していることで、それらの相互作用によって、今までにない作品空間を生み出し、読み手を未知の体験へといざなうから。

D 写真と言葉という異なる二つのメディアが並立していることで、相互にイメージが補われて場面の臨場感が強まり、ページ全体に異様な迫力が備わるから。

E 写真と言葉という異質な二つのメディアが同じページ上にあることで、共通の物語に対する表現方法の違いが際立ち、読み手に強烈な違和感を抱かせるから。

〔問二〕 空欄(2)(3)(7)に入れるのもっとも適当な組み合わせを左の中から選び、符号で答えなさい。

- |   |     |     |     |       |     |       |
|---|-----|-----|-----|-------|-----|-------|
| A | (2) | しかし | (3) | そもそも  | (7) | というのも |
| B | (2) | しかし | (3) | それゆえ  | (7) | なぜなら  |
| C | (2) | 一方で | (3) | そもそも  | (7) | したがって |
| D | (2) | さらに | (3) | それゆえ  | (7) | なぜなら  |
| E | (2) | 一方で | (3) | したがって | (7) | というのも |

〔問三〕 傍線(4)「いつも通っている道でさえ、写真では別のものに見える。」とあるが、これはどういうことか。その説明とし

てもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A 対象を純然たる視覚的存在として写し出す写真の特性により、道の風景が客体化され、いつもとはまったく異なる見方で風景を捉えることになるということ。
- B 道の風景が写真によって細部まで写し出されることで、普段は目に留まらなかった点も丹念に観察できるようになり、風景に対しての理解が深まるということ。
- C 肉眼では動的なものとして捉えられていた道の風景が、写真によって固定されることで、時間の流れが止まった景色がまるで異世界のように映るということ。
- D 道の風景に馴れ親しんだ人の眼と初めてその景色を見る人の眼が異なるように、写真は個人の思いや感情をとり除いて風景をありのままに見せるということ。
- E いつもは道の風景のただなかから周囲を見ていたのに対し、写真を通して道の風景を外から見ることによって、恣意的なものの見方が矯正されるということ。

〔問四〕 空欄(5)(6)に入れるのもっとも適当な組み合わせを左の中から選び、符号で答えなさい。

- |   |        |                   |
|---|--------|-------------------|
| A | (5) 矛盾 | (6) 現実を模した、不確かな幻想 |
| B | (5) 直結 | (6) 現実にはない、新しい可能性 |
| C | (5) 調和 | (6) 現実にも勝る、悲しい不条理 |
| D | (5) 対立 | (6) 現実に即した、確たる実在感 |
| E | (5) 適合 | (6) 現実で見た、既存のイメージ |

〔問五〕 傍線(8)「目覚めたまま夢を見ているような状態」とあるが、これはどのような状態のことか。その説明としてもっとも

適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A はつきりとした意識があるにもかかわらず、現実と想像世界の区別がつかずに、メディア上のイメージが現実のもののように見えて混乱している状態。
- B 本や映画、舞台などのメディアを通じたイメージ体験が終わった後も、それらに熱中していた時の興奮や高揚感がしばらく余韻として続いている状態。
- C メディア上のイメージに没頭する最中、自己投影や感情移入をすることにより、言葉や図像がこちら側に語りかけてくるような錯覚を抱いている状態。
- D メディアを通じて物語や映像に没入するあまり、想像世界の中で芽生えた意識や感情が、現実世界を生きている身体感覚に影響をおよぼしている状態。
- E 日常的に得ている触覚や感覚を失わずに、メディア上の想像世界にも深く関わり、その世界の中にあたかも別の身体があるかのように感じている状態。

〔問六〕 本文の内容としてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A 言葉で紡がれた物語を読むとき、眼で見る写真とは異なり、人は言葉から喚起されるイメージに対して意識だけを研ぎ澄ませて注意を向けている。
- B ベルティンクが言う支持体とは、本やスクリーン、舞台などの上に展開されるイメージを見ている時、その中に感じられる身体感覚のことである。
- C 写真が発明されてからの半世紀、言葉と写真を同じページに印刷するという発想は、技術的な難しさから目立った試みもなく忘れ去られていった。
- D 伝記や自伝において、写真が本の一箇所にとめられていることが一般的なのは、読者の文字や図像に対する視認性を妨げないための配慮である。
- E 写真文学の写真が、静止画で終わらず、読者の作品世界に対する想像を反映して動き出すとき、写真と言葉が一つになった新しい表現が生まれる。

